

ジョージ・マクドナルド『フォトジェンとニクテリスの物語』 ——昼と夜のメルヘン解読——

山田 敦子

日本大学大学院総合社会情報研究科

George MacDonald: *The History of Photogen and Nycteris* —An Interpretation of *A Day and Night Märchen*

YAMADA Atsuko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

This paper is a consideration on *The History of Photogen and Nycteris*. This work is one of George MacDonald's later fantasies that describe the birth and growth of Photogen, the day boy, and Nycteris, the night girl. Through the story of the two protagonists, it metaphorically depicts also a history of creation and salvation. As MacDonald's later work, it is neatly structured. The description of Nycteris, who is shut up in the darkness of a graveyard for 16 years, vividly shows that the truth of life lies in love and joy. MacDonald created a masterpiece fantasy by setting it in a graveyard, an extraordinary place. Although there appear no fairies and fairylands, this is surely good fantasy, as shown in the word *märchen* in the subtitle of *The History of Photogen and Nycteris*.

1. はじめに

ファンタジーの父と呼ばれるスコットランド出身の作家、ジョージ・マクドナルド (George MacDonald 1835-1905) は、ファンタジーを数多く残した。児童向けファンタジーは、数点の長編を除き、ほとんどが短編である。彼の短編集 *The Complete Fairy Tales* (1999)¹には、1864年から1879年にかけて書かれた作品が収蔵されているが、本稿で取り上げる *The History of Photogen and Nycteris : A Day and Night Märchen* (1879)はそのうちで最も後期の作品である。

この作品には、作者のそれまでの作品には見られない工夫がみられる。本稿では、その工夫に注目して物語世界を読み解いていく。

2. 物語の概略と材源

2.1 物語の概略

魔女ワトー(Watho)は、二人の妊婦を城に呼び寄せ

る。二人のうち貴婦人には城の最上階の太陽の降り注ぐ部屋を用意し、盲目の未亡人には城の岸壁に作られた墓場を用意し、出産までそこで過ごさせた。

未亡人は女の子を出産し、ニクテリス(Nycteris)と名づけられた。彼女は母親が暮らした墓場に幽閉されて育つ。暗闇で育った彼女は、この世に太陽があることも知らなかった。ある夜、地震をきっかけに、生まれて16年目にして初めて墓場の外(城壁の上)に出る。空や星や月を目にする。肌に風を感じ、空気が動くことを知る。素足で土を踏みしめ、木や花に触れ、花に香りがあることを知る。小川を見て水が流れることを知る。彼女は、見るもの全てに命を感じ、全てに喜びを感じる。ただ一つ、太陽だけは光が強すぎて怖かった。

一方、貴婦人は男の子を出産し、フォトジェン(Photogen)と名づけられた。彼は太陽の光だけを浴びて育つ。林や森に行くことを禁じられ、太陽が落ちる前に眠りにつくように育てられ、この世に影があることも夜の闇があることも知らなかった。馬や弓

¹ George MacDonald, *The Complete Fairy Tales*, PENGUIN BOOKS, 1999.

の名人に育った彼は、自分は誰よりも勇敢だと信じていた。ある日、山猫を追いたいという誘惑に負けて山猫を追っているうちに森で夜を迎えてしまう。彼は16年目にして初めて夜の闇を知り、怖さのあまり気も狂わんばかりになる。

そんな二人が夜の闇で出会った。ニクテリスは闇を怖がるフォトジェンを慰める。だが、フォトジェンは日の出とともに元気を取り戻すと、太陽の光を怖がるニクテリスをおいて帰ってしまう。

ワトーは、誰よりも勇敢に育てたはずのフォトジェンが闇を怖がり病気になったことに腹を立てて虐待する。ニクテリスにも腹を立て日光にさらして殺そうとする。殺されそうになった二人はワトーから脱出する。フォトジェンが逃げていくのを知ったワトーは、怒りで猛り狂わんばかりにフォトジェンめがけて突進する。だが、本当の勇気を持ち始めたフォトジェンは自分が殺される前にワトーを矢で仕留める。フォトジェンとニクテリスは結婚し、お互い知らないことを学び合いながら幸せに暮らした。

2.2 物語の材源

登場人物の名前には、ギリシア・ローマ神話の神々の名前からの借用が見られる。主人公の少女ニクテリス(Nycteris)の名前については、ギリシア神話のニクス(Nyx)は夜の女神で、エリス(Eris)はニクス(Nyx)の娘であることから、NycterisはNyxとErisに由来すると考えられる。従ってニクテリスは夜の子を意味する。神話のニクスは太古のカオスから生まれた最初の神々の一人であり²、原初の夜に関係している。これに対して少年フォトジェン(Photogen)の名は、英語のphotogenは自ら光を放つ発光生物という意味から、夜の子に対応して光の子(light's offspring.³)と捉えることができる。

ニクテリスの母親の名はヴェスパー(Vesper)で、vesperは宵の明星であり、Hesperusと同義である。「宵の明星ヘスペラの姿で顕現した母神ヘラの領

地」ヘスペリデスの園(Hesperides)は、「太陽が沈む極西にある不死の庭園⁴」である。従って、ヴェスパーの名は宵と不死の庭園に関連している。フォトジェンの母親の名はアウロラ(Aurora)で、曙を意味する。アウロラはギリシア神話のエオス(Eos)のローマ名であり、エオスは夜明けの母親を意味する。ギリシア神話でエオスの夫のティトニオス(「昼の女王の夫」)はセミになってしまうが、セミは太陽の再生のシンボルである⁵。従ってアウロラの名は曙、太陽、再生に関連している。

また、北欧神話の『エッダ』は、少年を月、少女を太陽と呼んでおり⁶、本作品とは逆になっているが、少年と少女を月と太陽に関連づけて物語っている点は似ている。ニクテリスが暮らす墓場は古代エジプトの王を真似てあることから、エジプト神話に関連している。古代の神々の名前が表す、夜、宵、暁、昼、月、太陽、闇、光は、意味のレベルでは創世、終末、生、死、永遠、再生などのモチーフである。本作品は、古代の神話から名前やモチーフを借用し、聖書を基盤に創作された新たな神話となっている。

3. 魔女ワトーの野望

3.1 魔女ワトーの企み

この物語は、魔女ワトーの企みと、企みに施された仕掛けによってダイナミックに展開していく。魔女ワトーの企みの動機は、物語の冒頭に読み取れる。

There was once a witch who desired to know everything. But the wise a witch is, the harder she knocks her head against the wall when she comes to it. Her name was Watho, and she had a wolf in her mind. She cared for nothing in itself—only for knowing it. She was not naturally cruel, but the wolf had made her cruel.(304)

魔女ワトーはすべてを知りたいと望んでいた。魔

² マイケル・グラント他著／西田実訳(主幹)『ギリシア・ローマ神話事典』大修館書店、1988年、p.386

³ George MacDonald, *The Complete Fairy Tales*, PENGUIN BOOKS, 1999, p.354.これ以後テキストの引用は引用文のうしろに頁数で記す。

⁴ バーバラ・ウォーカー著／山下主一郎訳『神話・伝承事典』大修館書店、1988年、P.322

⁵ 同上、p.66

⁶ 谷口幸男著『エッダとサガ—北欧古典への案内—』新潮社、1976年、p.27-28

女が知りたい全てとは何か。それはワトーの特徴に読み取れる。ワトーの特徴を3点あげると、1点目は彼女は全てを知りたいと望んでいること、2点目は賢くなればなるほど激しく壁に頭をぶつけるようになったこと、3点目は心の中に一匹のオオカミがすんでいることである。心の中のオオカミについては、「キリスト教の図像において、オオカミは信徒(子羊の群れ)を脅かす敵としての悪魔を象徴している⁷」ことが読み取れ、壁に頭をぶつけるようになったことについては、全てを知ることへの警鐘が読み取れる。よって、ワトーが知りたいと望んだ全てとは神の全てであり、神の全てを知ろうとする不遜さゆえにワトーは魔女なのである。ワトーは全てを知りたいという野望を達成するために計略を企てる。

3.2 妊婦アウロラと妊婦ヴェスパー

This witch got two ladies to visit her. One of them belonged to the court, and her husband had been sent on a far and difficult embassy. The other was a young widow whose husband had lately died, and who had since lost her sight.(304)

ワトーは、自分が選んだ二人の妊婦を自分の城に招く。妊婦の一人は宮廷(court)に属する貴婦人で、夫は遠くへ派遣されている。もう一人は夫を亡くしたばかりで、夫を亡くしてから目が見えなくなった未亡人である。二人に共通しているのは夫が傍にいないことであるが、社会的地位や身体的特徴という点では二人は対照的である。

ワトーは対照的な二人に対照的な環境を用意する。貴婦人アウロラには、太陽が降り注ぐ最上階の広々とした部屋をあてがい、部屋には楽器や本や絵などを揃えた。食事は新鮮な鹿肉や鳥で、飲み物は黄金色のぶどう酒やミルクなどであった。アウロラは出産するまでここでゆったりと暮らした。胎教としては最高の環境が用意されたのである。アウロラの髪は黄金色で、目は青色であった。アウロラという名前、黄金色の髪、部屋に降り注ぐ太陽など、アウロ

⁷ ハンス・ビーダーマン著／藤代幸一監訳『図説世界シンボル事典』八坂書房、2007年 p.72

ラを取り巻くすべてに輝きが表象されている。

一方の若い未亡人ヴェスパーには、城の裏側の岩壁の内側にある小さな部屋があてがわれた。そこは、エジプトの王の墓をまねて作った墓場で、窓はなく、日の光が入らない暗闇であった。彼女は出産するまで、岩壁の奥深い墓場に幽閉されて過ごした。彼女の食事は沼地の鳥やザクロや紫色のぶどうや、濃い赤い色のぶどう酒とミルクであった。ワトーは彼女に、ヴァイオリンの悲しい調べを聞かせて、悲しみから抜け出せないようにした。ヴェスパーを取り巻く全てに暗さと悲しみが表象されている。

ワトーが、対照的な二人の妊婦を選び出し、対照的な環境で過ごさせたことから、生まれてくる子供に二人の違いを引き継がせようとしていることが読み取れ、生まれてくる子の一方は栄光へ、他方は滅びへと導こうとしていることが窺えるのである。出産前、いわゆる胎教の段階から始めているところに、作者の科学的趣向が表れている。厚遇される者と冷遇される者の対照的パターンはメルヘンの様式の一つだとは言え、二人の環境の違いには壮絶なまでの痛ましさがある。だが、これは単なる痛ましさではない。墓場という舞台装置にはワトーの企てに対する作者独自の世界観が潜んでいるのである。

3.3 子供の誕生

ワトーの計略どおり、二人の妊婦はそれぞれワトーの目的にかなった子を出産する。

Watho at length had her desire, for witches often get what they want: a splendid boy to the fair Aurora. Just as the sun rose, he opened his eyes.(306)

ワトーは望んだものをついに手に入れた。アウロラは男の子を生み、男の子は太陽が昇った瞬間に目を開き、ワトーによってフォトジェンと名づけられた。彼の髪の色は金色であった。アウロラが生んだ男の子も母親と同様に光と金色で表象されている。

ワトーは、彼を徹底的に闇から遠ざけて育てた。その結果、昼間眠らず、夜目を覚まさない子に成長した。ワトーは彼をたっぷり陽にあて、黒いものは

見せず、彼の上に影ができることさえ避けた。

一方ヴェスパは暗闇で女の子を生んだ。ワトーは、女の子をニクテリスと名付けた。ニクテリスの肌は浅黒く、髪も眉もまつ毛も黒く、表情は穏やかだが悲しげで、予定通りヴェスパそっくりに生まれた。ワトーは、ニクテリスを、昼間眠り夜起きているように訓練し、雪花石膏のほの暗い光以外の光は見せないように注意深く育てた。暗闇で生まれたニクテリスは暗闇で過ごす事になった。

3.4 母親の目の色と子供の目の色

これまでのところ、ワトーは目的に合った二人の子を手に入れ、計略は順調に進んでいるかに見える。だが、ワトーの気付かないところで問題は起きていたのである。生まれてきた子がワトーの計略通り、それぞれの母親の特徴を引き継いで生まれてきたかといえば、実はそうではなかった。一つだけ違うところがあった。それはフォトジェンとニクテリスの目の色である。

フォトジェンの目の色は黒色で、それはニクテリスの母親のヴェスパの目の色と同じであり、ニクテリスの目の色は青色で、それはフォトジェンの母親アウロラの目の色と同じであった。マクドナルドは多くの作品で、青色を聖なる色として主人公にまつわる事物に用いている。この点、ニクテリスの目の色が青色であることに、彼女の救いは予示されているのである。ニクテリスが青い目を持って生まれたことでワトーの計略は失敗であったことを暗示させながら、物語は次の段階へと進んで行く。

4. 物語の舞台（1）——墓場

4.1 暗闇でも見えるニクテリスの目

ニクテリスは見捨てられた子であった。

No one in the world except those two was aware of the being of the little bat.(307)

小さなコウモリのような女の子がいることを知っているのはワトーとワトーの召使いのファルカ(Falca)の二人だけであった。ニクテリスは、この世に存在していることさえ世間に知られておらず、

外界から隔離された岩壁の墓場で暮らしていた。ワトーは、ニクテリスが生きながらえるだけの食べ物は与えたが、あとは放置した。注目すべきは、この非日常的な状況下で浮かび上がってくるものは何かということである。まずニクテリスの目である。

...the main point if which was that she should never see any light but what came from the lamp. Hence her optics nerves, and indeed her whole apparatus for seeing, grew both larger and more sensitive: her eyes, indeed, stopped short only of being too large. (307)

ワトーがニクテリスの育て方で最も気をつけたのは、ニクテリスにランプ以外の光を絶対に見せないようにすることであった。その結果彼女の目は大きく発達し、視神経も鋭敏になった。ここで見落とせないのは、目の発達が科学的に正しいかどうかということではなく、暗闇と目の発達との関係が説得力を持って迫って来ることである。

The little education she intended Nycteris to have, Watho gave her by word of mouth. Not meaning she should have light enough to read by, to leave other reasons unmentioned, she never put a book in her hands. Nycteris, however, saw so much better than Watho imagined, that the light she gave her was quite sufficient, and she managed to coax Falca now and then brought her child's book.(309)

ワトーはニクテリスに教育を施さず、多少のことは口伝えで教えたが、本は一冊も与えず、十分な光も与えなかった。だが、ニクテリスはわずかな光りでも見えたので、フォルカに頼んで字を教えてもらい、本を持って来てもらい、自ら学んでいった。ニクテリスの目は異常に発達したとはいえ、その目に粗野な印象はなく物事を深く考える目として迫って来る。ここに一つの真実が提示されている。彼女の目に提示された真実とは、人間は神の似姿として創造され(創世記 1:27)、言葉によって理性的な命を得ていることである(ヨハネによる福音書 1:4)。

さて、人間の器官には、目の他に耳もある。

She taught her music, in which she was herself a proficient, and taught her scarcely anything else.

But her chief pleasure was in her instrument...(309)

ワトーは、ニュクテリスにほとんど何も教えなかったが音楽だけは教えた。ニュクテリスの主な楽しみは楽器を弾くことであった。だが、なぜ、ワトーは滅びに導こうしているニュクテリスに音楽を教え、楽器を与えたのであろうか。その答えは、ニュクテリスの母ヴェスパーが聞いた音楽に見いだせる。ワトーの得意とする音楽は悲しい調べであった。ワトーは、ヴェスパーに悲しい音を聞かせ、悲しみから抜け出せないようにしたが、ニュクテリスにも同じことをしたと考えられる。だが、ニュクテリスは、ワトーの計略に反し、楽器を弾くことに喜びを見出した。音楽にも、命と喜びの関係が提示されている。

She was not unhappy. She knew nothing of the world except the tomb in which she dwelt, and had some pleasure in everything she did.(309)

ニュクテリスは不幸ではなかった。住んでいる墓場以外の世界を知らなかったのも、何もかもが喜びであった。ニュクテリスが暗闇で感じた喜びは、生きる力と関連しており、ワトーがどんなに用心深く滅びへ導こうとしても、ニュクテリスは闇の中で、悲しいとも不幸とも思わず、自ら言葉を学び、音楽を楽しみ、幸せに暮らしていたのである。

読者からみれば異常とも思える過酷な状況に、ニュクテリスが放置された理由の一端がここに見えてくる。外界から遮断された暗闇に身を置くニュクテリスはまだ世間の煩雑さに触れていない。だからこそ人間本然の姿が暗闇に浮かび上がるのである。人間本然の姿とは、神の言葉を学ぶ力を備えているだけでなく、何ごとにも喜びを見出す力を備えて創造されたということである(使徒言行録 13:52、詩篇 94:19)。キリスト教的世界観でいえば、人間の命は神からの賜物であり、生きる喜びも神からの賜物である。喜びはニュクテリスの生きる力となっている

からこそ、暗闇で生きながらえているのである。表面的には、悲惨な状況に見えても、彼女は世間を知らない分だけ神の近くにおいて幸せなのであった。ここで明らかになることは、墓場という舞台装置が楽園に近い所として機能しているということである。

4.2 雪花石膏のランプ

さて、ニュクテリスの大きく発達した目が暗闇で見ていたものは、本だけではなかった。

At often as she was left alone, she would fall to poring over the coloured bas-reliefs on the walls. These were intended to represent various of the powers of Nature under allegorical similitudes...(309-310)

彼女は一人でいる時、壁の浮彫を見ていた。洞窟はエジプトの王の墓を模して造られており、壁の浮彫も古代エジプトの墓地の浮彫を模したものである。浮彫は自然界のさまざまな力を寓的に表したものであり、古代の人々の生活、人生観、死生観、世界観、宗教観などが映し出されている。彼女は洞窟の奥深くにいらながらも、人間、事物、出来事など被造物の繋がり的一端を見つめることができたのである。

There was one thing, however, which moved and taught her more than all the rest—the lamp, namely, that hung from the ceiling, which she always saw a light, though she never saw the flame, only the slight condensation towards the centre of the alabaster globe.(310)

浮彫以上に、彼女に多くのことを教えたのはランプであった。ランプは何時もともっていたが、炎は見えず、雪花石膏のほやの真ん中あたりで少し光っているだけであった。彼女はランプを見つめ、胸がいっぱいになる。彼女が一人でランプを見つめていたことを考えれば、ランプのほのかな光は彼女の魂に直接働きかけていたことになる。ランプを見つめる彼女の内面で何かが変わろうとしていた。彼女はワトーの召使いのフォルカが墓所に入出入りするのを

見て、この部屋とは別の部屋があるのではないかと
思い始めたのである。

4.3 地震と壊れたランプ

そんな時、ある出来事が起きる。

Once, when she was thus alone, there came the noise of a far-off rumbling: she had never before heard a sound of which she did not know the origin, and here therefore was a new sign of something beyond these chambers. Then came a trembling, then a shaking; the lamp dropped from the ceiling to the floor with a great crash,...(310)

ある時、ニュクテリスが一人にいる時、遠くから音が聞こえた。原因の分からない音は、何か新しいしるしではないかと思う。音と揺れでランプが落ちたが、音と揺れは地震であり、それはちょうど彼女が光を意識し、別の部屋を希求し始めた時に起きた。聖書では、地震はイエスの復活や再臨の前に起きており(マタイによる福音書 28:2、ヨハネの黙示録 16:18)、地震は彼女が救いに与る予兆となっている。

Her lamp gone, the desire at once awoke to get out of her prison.The desire to go out grew irresistible. (311)

地震でランプが壊れて消えてしまった途端、彼女にこの牢獄から出たいという願いが芽生える。ランプを追って外に出たいという願望は抑えられなくなる。彼女は外に出る出口を必死に探し始める。探しているうちに、壊れたランプのかけらを踏み、足に痛みを感じる。神は人間の痛みを引き受けており(イザヤ書 53:3)、神と紐帯する人間もその身に痛みを受けることによって救済に与る。マクドナルドの他の作品の主人公たちも、救済に与る前にその身に痛みを受けている。ニュクテリスが受けた痛みもそれと同じで、救済に与るための痛みだと解釈できる。彼女はランプについてさらに探求する。

No, it was not the lamp any more now it was dead,

for all that made it a lamp was gone, namely, the bright shining o it.!(311)

死んだランプはランプではない、ランプがランプであるための光はどこかへ行ってしまったのだからランプではないと自問自答する。光を追って行きたいという心の叫びは、壁から壁へと手探りする行動へと進展し、その行動によって足元の象牙のサイコロを踏み、踏んだ痛みでニュクテリスは倒れる。倒れたはずみに墓場から外へと転がり出るのである。

ワトーがどんなに注意深く滅びへと導こうとしても、ランプの光に惹かれランプの光を追い求めるニュクテリスは、滅びとは逆の方向へと進んでいく。足に受けた痛みと、ランプを追って行きたいという意志と渴望がニュクテリスを外界へと導いた。ニュクテリスが足に痛みを受けながらも必死でランプを追いかける姿に、救いを求める意志がなければ救いには与れないことが象徴的に語られている。

墓場は、ニュクテリスを通して創造の真実を浮かび上がらせ、暗闇にかすかに光るランプとランプを追いかける目に救いの真実を浮かび上がらせる場として機能していることが鮮明になるのである。

5. 物語の舞台 (2) ——外界の自然

5.1 空、星、月、風

ニュクテリスがランプを追って初めて墓場の外(城壁の上)に出たのは夜だったため、外は墓場の洞窟と同じように暗かった。そこへ蛍が飛んでくる。ニュクテリスは蛍の光を追いながら考える。

If it did not know the way, it was yet light; and, because all light is one, any light may serve to guide to more light. If she was mistaken in thinking it the spirit of her lamp, it was of the same spirit as her lamp—and had wings.(312)

たとえ蛍が道を知らなくても、光は光である。全ての光は、もとは一つの光である。どんな光でも大きな光への道案内になると。一つということでは、

万物を一つの全体としているのは、神が万物を

創造されたという事実ではない……子なる神の父なる神への愛が、宇宙を一つに結んでいるのである⁸。

マクドナルドは「宇宙を一つに結んでいる」のは「父なる神の愛」だと述べている。ニュクテリスは、今、一つという概念に到達したところである。墓場にいるとき、外というのが何を意味しているのか彼女にはわからなかった(*She scarcely knew what out meant...*(311))が、今、それが徐々に具象化し始めているのである。

墓場の洞窟では雪花石膏の光に導かれ、今は蛍の光に導かれている。彼女の目はいつも光を追っており、彼女を導いているのは常に光である。

Before her was a very long and very narrow passage, broken up she could not tell how, and spreading out above and on all sides to an infinite height and breath and distance—as if space were growing out of thought.(313)

蛍を追っていると、前方に長くて狭い通路があり、その先には上にも外にも広がる空間が広がり、それは果てしなく高く、無音で、遙かで、まるで空間が生まれているかのようなのである。これは神概念の抽出である。

たとえばわたしたちの頭上に広がっている大空、目に見る、しかし形のない、無限の、かの空間がなかったならば？大空なしに、わたしたちは神についてどんな概念をもちえただろうか⁹？

マクドナルドは大空に神概念を得ている。大空だけではない。月も同様である。遙かかなたの屋根には月が壮麗に輝いている。ニュクテリスは、跪き月に向かって両手を広げる。跪く姿には、畏敬と高揚感が現れており、神との神秘的交わりが見て取れる。

⁸ C. S. ルイス編／中村妙子訳『燃やし尽くす火』新教出版社、1983年、P.139

⁹ 同上、p.145

ニュクテリスが見たり感じたりしたものは大空や月だけではなかった。

As she knelt, something softly flapped her,...It was likest a woman's breath. For she knew nothing of the air even, had never breathed the still newborn freshness of the world.(313-314)

月に向かって跪いている時、何かがそっとふれたが、それは女性の息のようであった。ニュクテリスは空気の新しさ、空気が動くことを始めて知るのである。息は神の臨在(創世記 2:7)を象徴している。月、星、広い空、生きて動く風、それら全てが彼女に沁み渡り、彼女の心は満たされて行くのである。こうして、マクドナルドは、自然を媒介にした神概念を可視化し、神の似姿に創造された人間の命とその喜びを臨場感豊かに描き出して行くのである。

5.2 木、花、水、土

ニュクテリスは、ある晩、いつもとは違うところに出たため、城の庭に降り立った。誕生後 16 歳にして初めて地面に降り立つという劇的場面である。

Noiseless as a moth, she flitted away into the covert of the trees and shrubs, her bare feet welcomed by the softest of carpets, which, by the very touch, her feet knew to be alive, whence it came that it was so sweet and friendly to them.(321)

ニュクテリスは蛾のように音もなく灌木の中に入る。彼女の素足を迎えたのは柔らかいじゅうたんだった。じゅうたんは生きていて、足に心地よかった。じゅうたんとは地面のことで、初めて土を踏み、土が活着していることを感じ、土の命に喜びを感じたのである。本物の自然に触れたニュクテリスの感動と、命の喜びが臨場感を持って迫って来る。土だけではない。花や木もみずみずしく生きており、風はそよぎ、花は香り、水は流れる。自然がもたらす命の喜び、命のみずみずしさが、彼女の全身に沁み渡る。

But flowers! ah, the flowers! she was friends with

the from the very first.(322)

そして花。彼女は花に感動し、花に親しみを感じる。花にはいろいろな色や香りがあることを知る。彼女は、自然に、美しさ、喜び、愛おしさを感じ、何もかもが善いと感じる。これは創造物全てが「極めてよかった（創世記 1:31）」という創造の喜びの可視化である。ニュクテリスは 16 年間墓場の暗闇でくらしていたからこそ、誰よりも命の喜びを感じたのであり、墓場は、命と喜びを鮮明に浮かび上がらせるという機能も果たしているのである。

地震は、墓場の浮き彫りの世界から新しい世界への転換を象徴すると同時に、古代の神概念からキリスト教的な神概念への転換を意味している。自然の事物がもたらす象徴的イメージは残存しつつ、それと関係づける意味を新しくして提示しているのである。

6. 昼の子フォトジェンと夜の子ニュクテリス

6.1. フォトジェンと暗闇

一方のフォトジェンだが、ワトーはニュクテリスとは正反対の育て方をした。フォトジェンには教えるだけのことを教えた。彼は乗馬を習い、弓の訓練を行い、騎射の名手に成長した。ワトーが教育係のファルギュに下した命令はただ一つ。どんなにフォトジェンが頼もうとも太陽が沈むまで外に出しておいてはいけないということだった。

For the boy had been so steeped in the sun, from childhood so saturated with his influence, that he looked upon every danger from a sovereign height of courage.(309)

フォトジェンは太陽だけを浴びて育ち、どんな危険も顧みない勇気のある少年に育った。ワトーはこれに満足した。だが、フォトジェンの勇気が試される時がやって来る。彼は、ワトーに禁止されていた山猫を追いたいという誘惑に負け、欲望の赴くまま山猫を追っていくうち、森で夜を迎えてしまうのである。これは原罪(創世記 3:1~6)の戯画である。フォトジェンはこれまで太陽が沈むのを見たことがなかったため、太陽が沈み始めた瞬間恐怖に襲われると

いう罰を受けたのである。

When the last flaming scimitar-edge of the sun went out like a lamp, his horror seemed to blossom into very madness.(319)

太陽が沈んでしまった時、恐怖は狂気となって爆発した。この恐怖から逃げ出すには、この森から逃げ出せばよいのだが、彼にはその勇気さえなかった。昼間の勇者は、肌をなでる夜の風さえ怖かった。

He had never seen the moon before—except in the daytime, when he had taken her for a thin bright cloud. She was a fresh terror to him—so ghostly! So ghostly!(320)

これまで月を見ることのなかった彼にとって、月もまた恐怖の対象でしかなかった。闇の恐怖は月のせいだとさえ感じるのである。同じ月を見て、ニュクテリスは涙を流すほど感動し深い喜びに浸っている。月や風をどう感じるかということに、ニュクテリスとフォトジェンの違いが巧みに描かれている。

彼の弱さは、太陽の光だけしか知らず、影も闇を知らなかったことにある。「闇が深淵の面にあり」(創世記 1:2)、「光あれ」(創世記 1:3)と言って光があったのであり、光の前に闇があった。光は神が創造したのであり、フォトジェンがどんなに光を浴びても、光源になることはできない。そうであるなら、フォトジェンは、光の前にあった闇を知らなければ世界を認識できない。彼は安らぎを覚える暗闇、人をやさしく包む暗闇を知らなかったため、暗闇を前にして恐怖だけが募ったのである。

6.2 フォトジェンを見守るニュクテリス

恐怖に震えるフォトジェンを助けたのはニュクテリスであった。彼女は、初めて下り立った庭で、小川に飛んできた蛾を目にする。蛾を Everywhere(自由自在さん¹⁰) と呼ぶことから、蛾は聖霊の隠喩(暗喩)

¹⁰ ジョージ・マクドナルド作／脇明子訳『かるいお姫様』岩波書店、1995年、p.165

と考えられる。見るものすべてに命を感じ、愛を感じていた彼女は、その蛾を愛するあまり追っていくうち、森の中で恐怖におびえるフォトジェンと出会う。

ニュクテリスは、闇を怖がるフォトジェンに、彼の目になってあげるといい、彼の心を恐怖から遠ざけようと勤める。16年間世の中を見ることなく暗闇で暮らしてきたニュクテリスが、現実の世界で多くのものを見てきたフォトジェンの目になるという。ニュクテリスに見えてフォトジェンに見えないものがあるとすれば、それは命に喜びと愛を感じるかどうかの違いにある。ニュクテリスは闇で育ったからこそ、誰よりも命の喜びと愛を感じた。最も見捨てられた子が、最も恵まれた子の目になるという劇的なパラドクスがここに設けられているのである。

6.3 ニュクテリスと太陽

さて、明け方になり、ニュクテリスは月が輝きをなくすのを見て、月が死ぬのではないかと自問自答し、月が死ねば自分も死ぬのではないかと恐怖を募らせる。彼女は月が沈むことも日が昇ることも知らなかった。夜が明けるとフォトジェンは元気を取り戻し、逆にニュクテリスは「怖い。これは一体何？ 死に違いない。まだ死にたくない (“Oh, I am so frightened! What is this? It must be death! I don't wish to die yet.(327))」と言って必死に助けを求める。だが、フォトジェンは彼女を置いて帰ってしまう。フォトジェンには、勇気が育たなかつただけではなく、愛も思いやりも思慮深さも育っていなかったのである。

ニュクテリスは太陽の光が怖く、フォトジェンは夜の暗闇が怖い。怖いという点は同じであっても、怖さに対する態度に違いがある。フォトジェンはただ怖がるだけなのに対し、ニュクテリスは怖さの原因は何かと考え、現象の奥にある真実にたどり着こうとする。では、なぜ、フォトジェンには思慮深さが育たなかつたのであろうか。彼が太陽について説明するところにそれが言い表されている。

“It is the soul, the life the heart, the glory of the universe,...The heart of man is strong and brave in his light, and when it departs his courage grows from him—goes with the sun,...(325)

「太陽は宇宙の魂であり、命であり、栄光である。男の心は光の中で強く勇敢になり、太陽が去ると勇気も去っていく」というフォトジェンの言葉には、太陽への否定が無意識的に語られている。アポロンに近い自分こそは宇宙の中心であるという傲慢さゆえに、彼には思慮深さが育たなかつたと考えられる。

7 ワトーの結末と二人の未来

7.1 フォトジェンの脱出とニュクテリスとの再会

フォトジェンは自分の弱さが納得できず、暗闇に七回挑戦し七回失敗し、精根を使い果たして病気になる。ここで疑問なのは、なぜ、七回も挑戦して勝てなかつたのかということである。ここにキリスト教的世界観と古代神話の世界観の違いが表れている。

古代オリエントの神話はほとんどどれをとっても、光の英雄の闇との戦いを伝えていないものはなく、光が闇に打ち勝って初めて世界の創造もしくは救済は可能になる¹¹。

この物語で強調されるのは光と闇の対立でも征服でもない。このことが、少年と少女の成り行きに象徴的に語られていくのである。

さて、ワトーは、フォトジェンが闇に勝てないで、病気になったことに腹を立て、彼を憎むまでになる。愛と憎しみは隣り合わせである。ワトーの彼に対する怒りは抑えることができなくなり、虐待し始める。虐待に耐えかねたフォトジェンには、殺されるのではないかという恐怖心が募り、城を出る決心をする。

昼間逃げるのは無理なので、夜逃げることにした。彼はナイフとぶどう酒とパンをポケットに入れたが、ぶどう酒とパンにはよほどの決意であることが表象されている。闇の恐怖と戦いながら逃げたフォトジェンは、平原にたどり着いた途端に動けなくなり眠ってしまう。目を覚ました時、彼の頭はニュクテリスの膝の上にあった。二人は再び森で出会った。

“I beg your pardon for leaving you as I did, for, as I

¹¹ マンフレート・ルルカー著、池田紘一訳『聖書象徴事典』人文書院、1988年、p.311

say, I did not understand. Now I believe you were really frightened. Were you not?"(335)

彼女の優しさに慰められた彼は、「置き去りにしたことを許して。ぼくはわかっていなかったんだ。きみは本当に怖かったんだね。」と謝った。彼は、ワトーから残忍な仕打ちを受けたことで、彼が闇が怖いと同じように、彼女は太陽が恐いのだということが理解できるようになったのである。明らかに彼は変わりつつあった。だが闇への恐怖はまだ克服できない。ニクテリスは、闇について話して聞かせる。

"...You must know how gentle and sweet the darkness is, how kind and friendly, how velvety! It holds you to its bosom and loves you..."(335)

「闇は優しく、気持ちよく、親切で、柔らかで、あなたを胸に抱きあなたを愛してくれる」と。暗闇で育った少女が、闇から与えられたのは愛であった。

愛こそ、私たち人間の状態の法である。この愛の法なしには、わたしたちは、暗闇の中を歩く人間が一直線に歩けないのと同様に、正義を行うことができない¹²。

ニクテリスの探究心や行動力は愛の働きによるものである。「宇宙を一つに結んでいる」ものは「父なる神の愛」であるが、彼女がフォトジェンに語った闇も、この愛に通じているのである。

ところで、今、二人がすべきことは、ワトーから逃げることである。二人が無事にワトーから遠くへ逃げていくには、それぞれ苦手な昼と夜を克服しなければならず、二人で支え合わなければ逃げおおせない。二人はいつ出発するかを巡って相談する。ニクテリスは、ワトーは昼間目がよく見えるので、夜出発した方がいいと言い、フォトジェンは、太陽が昇って自分に力が戻ってからにしたいという。

"No, no," persisted Nycteris; "we must go now. And you must learn to be strong in the dark as well as in the day, else you will always be only half brave. I have begun already—not to fight your sun, but to try to get at peace with him, and understand what he really is, and what he means with me—whether to hurt me or to make the best of me. You must do the same with my darkness."(336)

ニクテリスは、今行かなければならない、暗いところでも昼間と同じように強くなる練習をしなければフォトジェンの勇気は半分でしかないと言う。彼女も、太陽と戦うのではなく仲良くし、理解しようとしていると語る。太陽が、傷つけようとしているのか、よいことをしているのかを知ろうとしていると話し、フォトジェンも闇に対して同じようにした方がよいと言う。彼女が強調しているのは、戦うことではなく相手を知ることである。

洞窟の奥深くに見捨てられた少女が、いまや母親のような眼差しでフォトジェンを導いている。彼女はフォトジェンの手を取り率先して前を進んでいく。フォトジェンも、今やニクテリスを見捨てはしない。昼間は、彼が彼女を腕に抱いて運んだのである。お互い助け合いながら難局を切り抜けた。

物語の最後で二人は結婚する。

...if ever two people couldn't do the one without the other, those two are Nycteris and I. She has got to teach me to be a brave man in the dark, and I have got to look after her until she can bear the heat of the sun, and he helps her to see, instead of blinding her."(340)

フォトジェンは、「お互い相手なしでは生きていけない人間がいるとしたら、それはニクテリスと僕だ。ぼくは、ニクテリスに闇の中でも勇敢でいられるように教えてもらわなければならないし、ぼくは、ニクテリスが太陽の光に耐えて、目が眩まないように面倒を見なければならない。」と言う。光と闇は対立するものでも征服するものでもない。

¹² C. S. ルイス編／中村妙子訳『燃やし尽くす火』新教出版社、1983年、p.65

暗黒も神の御手の業であると考えるとき、それは神のまわりにおける光となる。光がなければ暗闇もありえなかったろう¹³。

闇も光も神の御手にあり、闇と光の対照によって人間は世界を認識できるというのがマクドナルドのキリスト教的世界観である。

7.2 ニュクテリスの特質

これまで見てきたように、闇が育てたニュクテリスの特質は、愛、真実への探求心、そして忍耐力であった。それを作者は花との関係にも描いている。

ワトーは、フォトジェンだけではなくニュクテリスも殺そうとした。ワトーはニュクテリスを日の差す草の上に放置した。

“She’ll have a sunstroke,” said Watho, “and that’ll be the end of her.”(332)

ワトーはニュクテリスが日射病になって死ぬに違いないと思った。だが、日射病でやられるどころか、動物にも守られる。彼女は、髪が作った影の中でやっと目を開く。最初に見えたのは、ヒナギクだった。ヒナギクは折に触れて、ニュクテリスに寄り添うように登場し、彼女を慰め、彼女の力の元となっている。ヒナギクの花を開いた時見えるおしべめしべを「金色の心臓(golden heart)」と言い表すが、「金色の心臓」という言葉には、ニュクテリスが何でも命と関連づけて考えていることが読み取れる。彼女はヒナギクの命について考えを巡らす。しおれたヒナギクはこのまま死んでしまうのではないかと考える。考えを巡らせた結果、次のような結論に達する。

For not only now did the whole seem perfect, as indeed it did before, but every part showed its own individual perfection as well, which perfection made it capable of combining with the rest into the higher perfection of a whole.(333)

全体が、以前もそうであったように、完璧にみえるだけでなく、それぞれの部分も完璧さを見せ、その完璧さによって他と結びつき、全体としてより高い完璧さに達している、と気付くのである。これは一つ一つの被造物と被造物全体のつながりの完璧さを述べたものであるが、彼女がしおれかかったヒナギクを見て考えたことと、ヒナギクが復活祭のころ咲くことを考え合わせると、永遠に滅びることのない復活の命への参入を言い表していると考えられる。

そして、彼女は、花はランプと同じである(The flower was a lamp itself! (333))と考える。

And what if the lamp did not mean to hurt her, only could not help it?(334)

ランプが、彼女を傷つけるためでないなら、そうするより仕方がなかったのではないかと考える。彼女はヒナギクの状態を観察するうち、苦しみは打ちひしがれるためにあるのではなく、彼女の命に必要なこととして与えられたものだと思いき、それならば夜の闇が戻って来るまで辛抱しなければならないと考えるのである。ニュクテリスは忍耐することで、ワトーの憤怒から救われた。彼女は、ヒナギクの姿に真実を見出そうとしたが、それは「神の概念は花そのものである¹⁴」というマクドナルドの思想を具現化したものである。

7.3 ワトーの滅びとフォトジェンの再生

ワトーは、フォトジェンが、日の光を怖がるニュクテリスを抱き上げるのを見て腹を立てる。ワトーは体に軟膏を塗り、髪を自分の体に巻きつけて、フォトジェンめがけて突進する。彼は、自分に向かって突進してくる生きものが巨大な狼だと気付く(...he saw that the creature was a tremendous wolf, rushing straight at him.(339)。ワトーがオオカミになっていたということは、ワトーにわずかばかり残っていた良心は消え失せて悪そのものを象徴していたことになる。フォトジェンはオオカミにやられる前に

¹³ C. S. ルイス編／中村妙子訳『燃やし尽くす火』新教出版社、1983年、P.180

¹⁴ C. S. ルイス編／中村妙子訳『燃やし尽くす火』新教出版社、1983年、pp.145-146

矢で射止めた。怒りは神からの離反である。ワトーは怒りを静めるどころか、怒りに身を任せたばかりにオオカミそのものとなって滅んだのである。

フォトジェンは、オオカミを射止めたことで、彼の驕り高ぶりも消え、再生へと向かうのである。

7.4 墓場と楽園

この物語にはマクドナルドの他の作品にみられる妖精や妖精の国が登場しない。それは、墓場が妖精の国に代わる舞台として機能しているからである。彼女が墓場で楽しむことができたのは、そこが彼女にとって楽園に近かったからである。ニュクテリスは、初めて墓場を出た時、次のことに気付く。

What a little ignorance her gaolers had made of her!
Life was a mighty bliss, and they had scraped hers
to the bare born!(314)

何と無知だったのか。世界はこんなに満ち足りているのに彼らは骨しかくれなかったと。これは、世界が変わったのではなく、墓場と外界とを対照することで彼女の認識が変わったのである。墓場から出るということは、このような世界に出て行くことを意味すると同時に、外界に出ないでいることは一生暗闇で過ごすことを意味している。だからこそ、二人は結婚して知らないことを教え合い、学び合い、高め合いながら、矛盾に満ちた煩雑な世界を歩もうとしているのである。

物語は、ニュクテリスの次のような言葉で終わっている

“... when we go out, we shall not go into a day as much greater than your day as your day is greater than my night?”(341)

「私たちが外に出て行くとき、あなたの昼が私の夜よりすばらしいように、あなたの昼よりもっとすばらしい昼へ入って行くんじゃない？」と。

8. おわりに

The History of Photgen and Nycteris は、昼の少年と

夜の少女の誕生と成長を通して、神の摂理を象徴的に物語った作品であり、魔女ワトーの計略と失敗に二重予定説への反駁が、見捨てられた少女がランプを追い求める意志と行動と方向性に万人救済の信条が提示されている。

この作品で特筆すべきことは、少女が16年間過ごした墓場である。彼女は暗闇に放置されたがゆえに、闇によって愛と探求心と忍耐力が培われた。16年目にして初めて外界の自然に触れたがゆえに、命の喜びや愛おしさを全身で感じ取ることができた。

少女は昼が怖く少年は夜が怖い。だが二人は昼も夜も知る必要があると考え、昼にも夜にも親しもうとする。二人は結婚し、互いに学び合い助け合って暮らし、やがて外に出て行く時が来たら、フォトジェンの昼よりもっと素晴らしい昼の中へ入って行くのだという。光と闇は二項対立ではない。光も闇も神の御手にあり、全てが万物救済の出来事に連なるというキリスト教的世界観が提示されている。

この作品にはマクドナルドの他の作品に見られる妖精が登場しない。妖精の国に代わって墓場が舞台として設けられていることに、彼が創出した新しい文学形式の成熟が読み取れる。

〈使用テキスト〉

George MacDonald, *The Complete Fairy Tales*, PENGUIN BOOKS, 1999

〈引用文献〉

C. S. ルイス編／中村妙子訳『燃やし尽くす火』新教出版社、1983年

ジョージ・マクドナルド作／脇明子訳『かるいお姫様』岩波書店、1995年

バーバラ・ウォーカー著／山下主一郎訳『神話・伝承事典』大修館書店、1988年

ハンス・ビーダーマン著／藤代幸一監訳『図説世界シンボル事典』八坂書房、2007年

マイケル・グラント他著／西田実訳(主幹)『ギリシア・ローマ神話事典』大修館書店、1988年

マンフレート・ルルカー著、池田鉦一訳『聖書象徴事典』人文書院、1988年

(Received: May 31, 2013)

(Issued in internet Edition: July 1, 2013)